

二十三年七月、待ち遠しかった東京ダモイの日が来た。タシケントを出発し、ナホトカ出港、舞鶴上陸は七月十九日だった。

故郷に帰って、入隊前と同じ環境で頑張って現在に至っている。

シベリア抑留記

大阪府 杉山 森一郎

私は、大正十一年三月六日、兵庫県水上群美和村(現、市島町)酒梨七一五ノ二、杉山庄吉の次男として生まれました。当時、父は群是製糸倉吉工場の技師として勤めており、家では母が農業と養蚕を行っておりました。家族は、祖母と両親と男子二、女子五の七人兄妹でした。

私は兵庫県立柏原中学校を経て、旅順工科大学技術員養成所を卒業後、新京特別市(現、長春)の満州鋳業開発株式会社鋳産資源調査所に勤務し、非鉄金属鋳

床の調査に従事しており、関東軍及び海軍武官府にもその調査資料を届けておりました。

軍隊には昭和十八年一月に北滿海拉爾の第八国境守備隊第二地区隊歩兵連隊第五中隊に入隊。連隊砲小队(四一山砲)で、十九年には歩兵砲中隊となりました。私は連隊の兵器委員室に勤務し、兵器、弾薬を扱っておりましたが、同年末ごろ編成替えになり、東山地区にて第一一師団の第三六二部隊歩兵砲中隊となり、二十年春ごろには部隊は興安嶺にて陣地構築を行っておりましたが、私は部下数名とともに海拉爾に残っておりました。ソ連参戦で朝から海拉爾は爆撃に違い、同日夜を徹して後退、博克図近くの興安嶺の本隊に合流、敵の戦車攻撃に対して迎撃の陣を張っておりましたが、命により齊々哈爾に退き、武装解除は榆樹屯で、その時韶勅の放送は聞きましたが、ラジオは雑音が多くはつきり聞き取れませんでした。

この地にて一カ月余り過ごし、九月下旬にこの榆樹屯より二段の有蓋貨物列車に乗せられ、五百人単位の大隊にて満州里を経て東に回り、「ダモイ」のはずが

長い長い旅を続け、「バイカル湖」を過ぎ「エニセイ川」のほとりの街「クラスノヤルスク市」の第五収容所に収容されましたが、この収容所は以前は刑務所だったようです。私たちは元のままの軍隊編成で強制労働に従事させられたわけで、その作業場は市中の大きな工場敷地でしたが、爆撃を受けたのか荒廃した工場跡で、この工場は「コンバイン」の一環工場で、私たちはその鑄物工場にて働くことになりました。熔解の「キューボラ」は、ソ連の作業員の技術も、冶金工学を修得した私から見れば余り感心できませんでした。

この収容所で三年ほど働きましたが、二年目ころには「ノルマ」の向上で、ある程度以上（三百五十ルーブル？）の収益を上げた者には、「ノルマ」以上の分だけ本人にその賃金が支給されるようになりました。そのため、私は街の劇場へオペレッタ「石の花」を観に行ったことがあります。

当時、人口三万人の都市のため、僻地のように管理者などによる糧秣のピンはねなどは余りなかったように思います。この収容所では民主運動も余りなく、収

容所内の生活はのんびりしていましたが、私は「ハラショーラポーター」として三年にて帰国のためナホトカの帰還終結地に送られました。しかし、不運にも日本政府より復員船をよこさないという理由で、再び、収容所の裏山（丘陵）に建設中の一戸建住宅が数十戸あり、その建物に入居し、この場所より港まで行軍、約一時間半を要したと思いますが、住宅及びビルの建設作業に従事しました。

その作業よりも先ず、朝も夕も暗いうちの往復で、夜はまた民主委員が待ち構えていたように民主教育の「レクチャー」があり、休日には楽しみのようにつるし上げがたびたび行われ、私もその対象になったこともあります。しかし幸か不幸か、二十三年の「クリスマス」のころだったと思いますが、高熱が出て意識不明となり、ナホトカの病院に入院し、その作業隊とは離れることができました。いま思えば、幸運だったと思います。

この病院にて気がついたときは、陽光の差し込む暖かい季節となっており、この病院の医師（日本人）は、

休みの日には港の入江の奥にて「ワカサギ」を釣ってきて食べさせてくれました。彼は最後までここに残ってみんなの送還を見届けると言っていました。この方の名前をどうしても思い出せず、残念で仕方がありません。そして二十四年八月、初便の病院船「高砂丸」にて舞鶴港に入港、復員することができました。

帰還後も体調は思わしくなく、休養と社会復帰の準備として親戚の工場の手伝いをしながら体調を整えておりましたが、不運にも、満州鉱発の同僚は通産省に入省しておりながら、二十四年に公務員の定員制が敷かれて採用にはならず、たまたま明石市大久保のサンエナメル(株)(東洋製缶系)のうわ葉担当として「セラミック」の研究をしていましたが、不況のため二十九年夏倒産に遭い、路頭に迷うような状態になりました。幸い知人の紹介で二十九年十一月に大阪に進出して間もない大阪読売新聞に入社することになり、定年後も六十五歳まで勤務しましたが、人間万事塞翁が馬と申しますか、いろいろ勉強になり、よき人間関係が得られ、現在は多くのボランティアに老後を捧げられるよ

うになり、生きて帰れたことに感謝いたしている次第です。

遠いウズベクの地で

千葉県 内田 健次

終戦を鎮南浦で迎えた私たちは、悲憤やるかたない日々を送っていた。しかし特別仕事があるわけでなく、なす事のない空虚な日々が続いた。

十一月末、武装解除のため、前にいた平壤に集結のため自動車で輸送された。ここで鎮南浦へ行く組と三郷へ行く組とに分けられた。古参の憲兵たちは、朝鮮人たちに顔を知られているので鎮南浦へ帰るのを好まず、そこに残ったが、私は新参であり、あまり顔を知られていないので、鎮南浦に行く組に入った。

鎮南浦に着くと、そこにいた晝部隊は上陸用舟艇で日本に帰った後だった。乗って来た自動車は徴発したものでだったので返してしまっ、足がなくどうするこ